

農報

水稲



田植えについて



水稲

新木 真一
指導販売部
0969-22-1105

田植え

4月上旬より田植えが始まります。苗は、田植えの5日前位から育苗ハウスのサイドビニールを下げて、外気に充分ならしましょう。

① 田植えの適期は4月5～15日です。

② 植え付け本数は、坪当たり55～60株程度、1株の苗数は3～5本が

標準となります。苗数が多くなると過繁茂の原因となり、倒伏や病害虫が発生しやすくなりますので注意しましょう。田植機の整備・調整は事前に必ず行って下さい。

③ 植え付けの深さは活着や分けつ等に大きく影響しますので、2～3cmを目安としましょう。

水管理

暖かい日中は浅水にしますが、活着するまでは朝晩冷え込むことがありますので、新しい根が出るまでは深水にしましょう。活着後は浅水管理で水温・地温の上昇を図り、分けつの促進に努めて下さい。

病害虫防除

初期では、イネミズゾウムシや葉いもち病が防除の中心となります。田植え前に必ず箱施薬を散布ムラが無いように施用しましょう。

除草剤は、田植え後5～15日に散布し、その後は湛水状態を5日程度保って下さい。水の掛け流しや、土の表面が見えるような圃場は、除草の効果が落ちます。使用方法は早期水稲耕種基準に記載しています。

除草剤の田植え前処理の際は、7日以上間隔を取ってください。

(除草剤散布後、7日間落水しないように。)

果樹



3月の柑橘園管理



果樹

山下 俊二
下島営農指導センター
080-1729-1632

1. 家庭選別の徹底（貯蔵中の管理）

1月末の寒波により、カンキツ類ではす上がり果の発生等が心配されています。また、デコボンや清見では今後ヤケ果の発生等も見られてくると思いますので出荷時に混入が無いよう果実の状態を確認し、出荷をお願いします。

河内晩柑では本格的な収穫期に入ります。収穫前には貯蔵病害の消毒を徹底し、収穫しましょう。

2. 河内晩柑の収穫基準

品 種	区 分	収穫時期	予 措
河内晩柑	適期採取	2/20～3/31	14日(3%)
	後期採取	4/1～4/30	7日(2%)
	木成り採取	5月以降	—

3. 病害虫防除

3月の防除ではICボルドー及びハーベストオイルを基幹防除で入れていますが、1月末の寒波により樹体の状態が悪い樹が見られております。枯れ込み・落葉・葉色が悪い等樹の状態がおかしい場合は、散布を控える事をご検討下さい。

対象病害虫	品 種	農薬名	希釈倍数	備 考
かいよう病	温州	ICボルドー66D	60倍	3月中旬(発芽前)
	中晩柑			3月中～下旬(発芽前)
ミカンハダニ	中晩柑	ハーベストオイル	80倍	3月中～下旬(発芽前)

4. 施 肥

栽培タイプ	肥料名	品種名	施肥時期	10a 当たり
通常タイプ	熊本果樹肥料 10-7-4	極早生温州	3月上旬	4袋
		ボンカン	3月上旬	5袋
	ひのくに果樹 9-3-3	清見・河内晩柑 甘夏・パール柑	3月上旬	4袋
		熊本デコボン 8-3-3	デコボン	3月上旬
省力タイプ	アグリロング28号	清見・河内晩柑 甘夏・パール柑 デコボン	3月上旬	6袋 6袋

5. 樹勢回復・着花対策

収穫が終わりましたら、尿素等を3回程度葉面散布して下さい。その後、花が少ないと予想される園では花芽分化促進を目的に、ファームント等を3回程度葉面散布して下さい。

目的	薬 剤 名	希釈倍数	備 考
樹勢回復	尿素 アミノジューシーN14	500倍	収穫後3回程度集中散布を行う
	神協スピリッツ	500～1,000倍	
花芽分化促進	ファームント ジューシーエース	500倍	樹勢回復終了後3回程度散布

當情



野菜



スナップエンドウに多く発生がみられ、特に注意が必要な病気です。



野菜

田中 直
上島営農指導センター
080-1729-1636

厳寒期を過ぎ、気温が上昇するとともに病気の発生も多くなってきます。今回は、特に注意が必要な病気を取り上げました。

【うどんこ病】

発生適温は22～24℃で、ハウス内の風通しが悪く乾燥している時や昼と夜の温度較差が多い時などの環境で多発します。発生後、2週間ほど盛んに胞子を作り風や振動によって容易に伝染します。窒素肥料の多施用による収穫期の遅れや日照不足も発病を助長します。

発生初期からの薬剤散布で防除が可能ですが、防除が遅れると枯れ上りが速まり、莢(サヤ)の品質低下が見られます。発病に注意して初期防除を行って下さい。

【灰色かび病】

好湿性病害で、多湿になりやすいハウス栽培で問題となります。一般的には花が終わって2～3日のものから、時には開花前の幼果にも発生します。まず、花卉が水浸状に腐り表面に灰色のカビを生じます。このカビは容易に繁殖しますので、発病環境が良ければ防除も困難になります。又、葉茎の発生はほとんどが発病した

花卉や幼果が落ちて付着した物です。温度条件では、10～25℃で胞子の発芽が促進され、感染は15～20℃が最適となります。発生を抑えるにはハウス内の換気、被害葉茎・花殻の除去、農薬散布が防除方法となります。

【さび病】

10月頃より気温が下がると角張った褐色～黒色のかさぶた状のもの(冬孢子堆)が葉裏の表皮下に形成されます。発病が激しい場合は葉全体をさび状粉が覆い、葉が巻きあがるようにして枯死します。さび病の好適条件は、湿度が高く、日照不足のエリアです。ハウス内が30℃以上にならないように換気が必要です。

以上のようにどの病気にも共通ですが、晴天日には風通しを良くし、過湿に注意することが大切です。又、チッ素過多になると軟弱に育つため病原菌に感染しやすくなるのでバランスの良い肥料で丈夫に育てることで

花卉



クルクマ栽培について



花卉

中原 英幸
下島営農センター
080-1729-1629

項目	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
栽培体系		○	—	○			← 通常栽培 →					
元肥	10a当り窒素、リン酸、加里を成分で10～15kg程度施用します。(肥料名:CDU555、エコロング、LPコートなど)											
定植	畝幅135cm、畝間75cm、株間40cmの千鳥植え。10a当り3,000球程度。											
追肥	1次茎を採花後、追肥を行います。肥料が切れると葉色が薄くなり、勢いもなくなります。葉色を目安に追肥を行います。硫黄燐安、天草花、ロング肥料などを施用するか、液肥を行います。											
通常管理	定植後は十分に灌水を行い、こまめに灌水を行います。 葉が外側に巻く状態は水をほしがっているサインですので、花の部分に水が常に溜まるように水管理します。定植後、保温のため畝にビニール被覆する場合は、灌水不足だと球根が焼け腐敗するので注意します。 風に弱いため、基本的にはサイドビニールを設置し、サイドは開けたままとします。 基本的には遮光資材は行いませんが、品種次第では苞葉が日焼けしますので、20%以内の遮光を行います。 雑草対策として、定植後、芽が出る前にゴーゴーサン乳剤を散布します。雑草が大きくなってからは効果がありません。また、敷ワラやヤシガラ、ケントップ等を畝へ敷き、雑草対策とします。											
越冬管理	球根が10℃以下の低温管理では腐敗しますので、出来る限り保温に努める管理が必要となります。掘り上げて球根貯蔵するには、腐敗率が高くなりますので、基本的にはハウスでの圃場掘置きとします。冷蔵庫がある場合、15℃程度で管理保管することにより、腐敗を防げます。地上部の葉が枯れたら切り取って、ハウス外で処分します。外気温が10℃以下になる頃、ハウスを閉め切ります。12月に入り、土壌表面にビニール被覆し寒害を防ぎます。できればサイド及び天井ビニール二重カーテンします。											
越冬後管理	被覆ビニールを除去後、灌水を十分に行います。また、さび斑病防除のために、殺菌剤で灌水処理を行います。出芽前にゴーゴーサン乳剤で雑草対策を行います。被覆ビニールを除去するタイミングが遅れると芽が焼けるので注意します。基本的には、形体1の管理と同じとなります。											
掘置追肥	出芽後速効性、緩行性肥料を施用します。10a当り各成分で10kg程度です。肥料名は形体1と同じです。肥料によりませんが、1ヶ月～3カ月に1回の割合で追肥を行います。液肥でもよいと思います。											

○病害虫防除

害虫では、ヨトウムシ類とナメクジ類となります。定期的に防除します。

《ヨトウムシ類》	《ナメクジ類》
プレオフロアブル 1,000倍	スラゴ 5g/m ² 発生場所及び株元配置
アフーム乳剤 1,000～2,000倍	

病害では、さび斑病が多発生します。定期的に防除し、発生を抑えます。球根への灌水処理が効果があります。抵抗菌がつかないように同じ系統の薬剤散布連用を避けます。

《さび斑病》

系統	薬剤名	希釈倍数	使用方法
抗生物質	ポリペリン水和剤	1,000倍	散布
有機硫黄系	ジマンダイセン水和剤	400～600倍	散布
ベンゾイミダゾール系	ベンレート水和剤	1,000倍	散布



シャロームピンク



エメラルドハロー